

授業概要

人間がもっとも知りたいこと。それは人間のことです。そして、自分のことは知っている（あるいは知っているつもりになっている）から、興味は自ずと他者へと向かうはずで。

けれど、そもそも、他者にはなれないのだから、他者を完璧に理解するなんて、無茶な話です。それでも、人間は人間のことを知りたがるのです。それだけ、他者を理解することは、人間の根源的な欲求といえます。

人間を、そして他者を知りたくて、人類学という研究分野はおおいに隆盛し、現在にいたっています。その守備範囲は多岐に及びますが、本講義では、言語や社会といった文化的側面に照射する文化人類学を扱いたいと思います。融通無碍で複雑怪奇な人間社会に挑む文化人類学は、ともすれば、難解な理論・概念が求められます。でも、その説明は最低限に抑えたいと思います。より具体的な研究実践例の確認に力点を置くことで、親しみやすい文化人類学を提示したいのです。だから、受講生のみなさんには気軽に、でも積極的に授業に参加し、しっかりと人間に向き合ってもらいたいです。

授業計画

第 1 回	導入：ある研究者の履歴
第 2 回	文化人類学ノート①：文化人類学の歴史
第 3 回	文化人類学ノート②：ムギとイネの人類学
第 4 回	文化人類学ノート③：風土論
第 5 回	文化人類学ノート④：婚姻・家族・親族
第 6 回	インド横断ひとりぼっちの旅
第 7 回	文化人類学の理論①：贈与論と機能論
第 8 回	文化人類学の理論②：カーストとトーテム
第 9 回	文化人類学の理論③：構造主義
第 10 回	文化人類学の理論④：熱い社会、冷たい社会
第 11 回	呪術の人類学①：宗教人類学という地平
第 12 回	呪術の人類学②：パゴールとコピラージ
第 13 回	呪術の人類学③：スリランカの呪術師
第 14 回	草木虫魚の人類学：あなたのまわりのアニミズム
第 15 回	総括Ⅰ：人間文化における普遍化と局地化の諸相
第 16 回	総括Ⅱ：文化人類学の可能性

到達目標

- (1) さまざまな人間文化の多様性を知り、国際化する社会に貢献できる力を培う。
- (2) 文化人類学の基本的な考え方に触れ、複雑な現代社会を理解する力を向上させる。
- (3) 文化の多様性を掌握することで、正しい国際文化理解を実践できる。

履修上の注意

- (1) 予備知識は必要ありませんが、主体的・積極的な授業参加を希望します。少なくとも、講義中は、貪欲に知識を吸収する意欲だけは持っていてほしい。
- (2) 欠席・遅刻・早退については、理由（就職活動、教育実習など）を鑑み、これを認めることがあります。

予習復習

予習・復習の必要はありません。

評価方法

理解度の確認 80%、平常点評価 20%（出席状況、講義中の発言など）

テキスト

- (1) テキストは指定しません。関連資料については、適宜、配布します。
- (2) 文化人類学の著作は多岐に及びますが、入門書として、以下を紹介します。
祖父江孝男『文化人類学入門』（中公新書）。